

オーラル・コミュニケーションタスクにおける 意味のやりとりの質的研究

小山 葉月*・猪井 新一**

(2010年9月15日受理)

A Qualitative Study on the Negotiation for Meaning in Oral Communication Tasks

Hazuki KOYAMA and Shin'ichi INOI

キーワード: オーラル・コミュニケーション, タスク, 意味のやりとり, ストラテジー

本研究の目的は、インフォメーション・ギャップタスクと会話タスクという、二種類の異なるコミュニケーション・タスクにおける意味のやりとりを調査することである。14名の日本人大学生に対して実験を行い、発話を分析した結果、意味のやりとりのきっかけ、ストラテジー、ストラテジーに対する返答は、タスクの種類によってその質が異なるということが判明した。その一つは、両方のタスクにおいて、繰り返しのストラテジーが多用されていたが、繰り返された要素はインフォメーション・ギャップタスクにおいては日付や時間が、会話タスクにおいては固有名詞であった。このように、タスクの目的や重視される情報、インストラクションなどの要因が、発話の分析結果に深く関わっていた。英語教育の現場において、学習者のコミュニケーション能力を養うためには、本研究で用いられたような、異なる種類のタスクを用いて意味のやりとりを体験させることが必要である。

はじめに

改訂学習指導要領(平成20年3月告示)によると、中学校における外国語科の目標は、コミュニケーション能力の基礎を養うことである。コミュニケーション能力を養うにあたっては、一方的に情報を伝えるだけでなく、会話している相手と情報を交換する、双方向のコミュニケーションを体験・学習する必要がある。本論の目的は、双方向コミュニケーション・タスクにおける意味のやりとり(negotiation of meaning)の、タスクによる質的な違いを明らかにすることである。タスクとして、インフォメーション・ギャップタスクと会話タスク(topic conversation task)の2種類を用意し、日本人大学生から実験によりデータを収集し、発話分析を行った。

小学校における外国語活動が導入されたことで、中学校以降の英語教育に対しては、小学校で養われたコミュニケーション能力の素地を生かし、基礎・基本的な内容を習得させることが求められる

*筑西市立関城中学校 **茨城大学教育学部英語教室

ている。特に、言語活動の取扱いについては、中学校学習指導要領解説外国語編の中で「実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」（文部科学省，2008，p. 20）などの双方向のコミュニケーション活動を行うように明記されている。

「意味のやりとり」とは、会話参加者が、会話中のコミュニケーションに支障をきたす問題を事前に回避したり、すでに生じてしまった問題を解決したりする過程を指す。これまでに数多くの研究者が、意味のやりとりは、会話している相手から理解可能なインプットを受容する機会と自らのアウトプットを修正する機会を生み出すため、第二(外国語)言語習得に寄与すると主張してきた(Swain, 1985, 1995; Long, 1983, 1996)。

意味のやりとりは、主に「きっかけ」・「ストラテジー」・「ストラテジーに対する返答」・「返答に対する反応」の4要素から構成される(Varonis and Gass, 1985; Gass and Varonis, 1985; Ellis and Barkhuizen, 2005; Nakahama, Tyler, and Lier, 2001)。本研究においては、これら4要素のうち「きっかけ」、「ストラテジー」、「ストラテジーに対する返答」の3項目に着目し、タスクによる質的違いを分析する。

研究方法

日本人大学生14人を対象に、二人一組で行う2種類のオーラル・コミュニケーションタスクを与え、その様子を録画・録音し、分析した。被験者は英語教育を専攻しており、日頃から大学での授業等で、英語で会話する機会を有している。長期に渡る海外生活経験をもつ者はおらず、これまで、主に学校での授業を通して、外国語として英語を学習してきた。

今回使用したタスクは、インフォメーション・ギャップタスクと会話タスクである。それぞれ、本実験とは別の被験者に協力をいただき、予備実験を行い、事前に問題点を改善することで、本研究に適したタスクを準備した。本研究で使用したインフォメーション・ギャップタスクは、提示された夏休みの予定表を見ながら、パートナーと夏休みの計画について相談するための日時を決めるという内容である。各ペアに2種類の予定表が提示され、相手の予定表を見ずに、英語で会話する。被験者は、自分の予定を相手に伝えるだけでなく、相手の予定についても聞き出さなければならない。一方、会話タスクは、インフォメーション・ギャップタスクとは異なる相手とペアになり、自分自身の夏休みの予定について、英語で5分間自由に会話するというものである。被験者には、自分の予定についてなるべく詳しく話し、相手の予定についても詳しく聞きだすように指示をした。

被験者の発話は全て録画・録音し、書き起こした上で、その中に見られる意味のやりとりを質的に分析した。はじめに、会話中の意味のやりとりを示すストラテジーを探し、そのきっかけとなる対話者の発話と、ストラテジーに対する返答の意味や役割について分析・考察した。ストラテジーの分類や定義は、研究者によって多少異なるため、先行文献を参考に、本研究における分類表(表1)を作成して分析した。

表1 ストラテジーの分類

Comprehension checks	話し手の以前の発言が、対話者に理解されたかどうか確認する表現。
Confirmation checks	話し手が、対話者の以前の発言を正しく理解しているか確かめるために使う表現。対話者の以前の発言の一部または全てを繰り返すことが多く、上がり調子で発音される。新しい情報を求めて用いるストラテジーではない。
Clarification requests	話し手が、対話者の以前の発言の意図をよりはっきりさせるために使う表現。対話者の以前の発言に関する新しい情報や、より詳細な説明を対話者から引き出すことを目的として用いられる。
Receipts through repetition	上がり調子で発音されずに、対話者の以前の発言の一部または全てを繰り返す表現。(Greer, Andrade, Butterfield, and Mischinger, 2009)
Completions	途中でとぎれてしまった対話者の発言の続きを埋める表現。
Meaning repairs	対話者の以前の発言の内容を訂正する表現。言語の形式を訂正するものではない。

結果および考察

1. ストラテジー

実験中、被験者は、表1に挙げられている6種類のストラテジーのうち、Comprehension check 以外の5種類のストラテジーを用いた。Comprehension check に関しては、どの被験者も使用しなかったため、分析対象から取り除くことにした。使用されたストラテジーを分析したところ、対話者の直前の発話の一部または全部を繰り返すことによってストラテジーとして活用している場面が多いということがわかった(例1, 2, 3)。例1と例2は、インフォメーション・ギャップタスクに取り組んでいる最中の対話において用いられた、繰り返しを含むストラテジーを示している。例1では、1行目において、S11(生徒のID番号、以下同様)が、月曜日について話そうとして“Monday”という単語を発したところ、S12は、その語をそのまま語尾を上げて繰り返すことにより、自分がその情報を正しく聞き取れたかどうかを、S11に確認している。また、その後3行目においてS11が時間に言及すると、すぐにS12がその時間を“From nine”のように繰り返している。しかし、この場合、2行目の繰り返しとは異なり、語尾は上がっていない。これは、単にS12が自分自身の中で対話者S11の発話を確認するために用いたストラテジーと考えられる。つまり、これら二つの繰り返しは会話の中で異なる役割を果たしていると言える。

例1

- S11 うーん、So、あ、Monday,
 S12 あ、Monday? ← Confirmation check
 S11 Monday, my free time is, あー、from nine
 S12 From nine. ← Receipt through repetition
 S11 To one.

注. S11: Student 11; S12: Student 12

例2において、S3とS4は、お互いに予定の空いている日程を探すため、都合のよい時間帯を確認している。4行目から8行目にかけて、S3はS4の直前の発言“nine, Sunday”をそのまま繰り返している。例1の4行目と同様、語尾は上がり調子に発音されていない。これらの繰り返しは、単にS3が対話者S4の発言の中で重要と思われる情報を、自分の中で反すうしていたものと考えられる。

例2

- S4 I, あ I'll be free
 S3 Oh.
 S4 えー, nine, Sunday.
 S3 Nine, Sunday. ← Receipt through repetition
 S4 の えー, from nine o'clock.
 S3 Nine o'clock. ← Receipt through repetition
 S4 To えーと, four o'clock p.m.
 S3 Four o'clock p.m. ← Receipt through repetition

上記例1, 2に見られるように、インフォメーション・ギャップタスクにおいて、被験者は、対話者が直前に発した日程や時間を多く繰り返していた。この結果には、本実験で用いたタスクの特性が影響していると考えられる。本研究で使用したインフォメーション・ギャップタスクは、互いの予定を合わせるという目的をもって行うものであり、日程や時間は、目的を達成するために極めて重要な情報であった。よって、被験者はそうした重要な情報を正確に伝え合おうとしたため、何度も対話者の発言を繰り返したものと思われる。

被験者は、会話タスクにおいても多くの繰り返しを活用していた。例3と例4は、会話タスクにおける繰り返しを含むストラテジーを示している。例3において、S11とS13は、S11の夏休みの予定について話している。2行目で、S13はS11の直前の発言の中の1語“Brast” [sic] を、語尾を上げながら繰り返している。この繰り返しは、二通りの解釈ができる。一つは、S13は“Brast” [sic] という語の意味(brass band)は分かかっていて、単に正しく聞き取れたかどうかを確認しようとし、Confirmation checkを用いたという解釈であり、もう一つは、“Brast”という語が一体何を意味するかが分からず、S11に説明を求めるためにClarification requestとして繰り返しを用いたという解釈である。どちらの解釈が正しいかは、本研究においては決定しかねるが、被験者が繰り返しを活用して会話を円滑に進めようとしていることが示されている。

例3

- S11 うーん, I, I'm, I'm going to see Brast, Brast [sic]?)
 S13 Brast [sic]? ← Confirmation check/ Clarification request
 S11 うーん, par, percussion, percussion musical.
 S13 ああ! I see.

例4は、語尾を上げずに発音する繰り返しを数多く用いた会話の一例である。5行目と7行目において、S9は、S7が夏休みに友達としたいスポーツを挙げるたびに、そのスポーツの名前“Badminton”, “Volleyball”を繰り返している。また、S7も10行目において、S9が直前に発した施設の名前を繰り返してい

る。例 4 における繰り返しは、すべて語尾を上げずに発音されており、ストラテジー使用者が、自分自身の中で、聞き取った情報を確認するために用いたものである。

例 4

S7 Yes. And, and, あー, あ, (2) I want to (5) I want to do some, a lot of sports with English member.

S9 Ah ah ah, yes.

S7 For example, soccer, badminton,

S9 Badminton ← Receipt through repetition

S7 Volleyball.

S9 Volleyball ← Receipt through repetition

S7 Football, yah.

S9 あー, And we, we will go to *Hawaiians*.

S7 Hawaiians, yah.(laughing) ← Receipt through repetition

注. (2); (5): 沈黙の秒数 (以下, 同様)

例 3, 4 にあるように、会話タスクにおける繰り返しの内容は、インフォメーション・ギャップタスクとは異なり、物の名前や地名などの固有名詞が多いということが分かった。会話タスクの場合、トピックのみを限定したものなので、被験者は、対話者が発する情報をあらかじめ予測することが難しく、知らない語や予期しない語が登場することもしばしばあったようだ。よって、そうした語を繰り返すことで、相手に確認したり、自分の中で情報を整理したりしていたと考えられる。

例 1 から例 4 に示されるように、本研究において、多くの繰り返しがストラテジーとして活用されていた。被験者が繰り返しのストラテジーを多く用いた要因としては、他者の発話の一部もしくは全部を繰り返すことは、言語学習者にとって簡単に用いることができるストラテジーだということが考えられる。Chesterfield and Chesterfield (1985) によると、第二言語を学ぶ子どもたちは、他のストラテジーよりも早い段階から、他の人の発言を繰り返す手法を用いている。また、Council of Europe (2001) と Liskin-Gasparro (1987) も同様に、繰り返しは学習初期の典型的な特徴だと主張している。本研究の被験者は、英語で会話することに比較的慣れてると言えども、授業以外の普段の生活の中で、英語で会話する機会はほとんど有していない。したがって、容易に用いることのできる繰り返しをストラテジーとして頻繁に使用したと推測される。

また、繰り返す内容は、それぞれのタスクの目的に密接に関係していた。Seedhouse (1999) は、対話者に繰り返すように求める情報は、タスク完了のために必要不可欠な情報であると指摘しているが、本研究では、対話者に繰り返すを求める場合以外に、自分の中で相手の情報を整理したり、さらなる説明を求めたりするときにも、内容上重要な情報を繰り返すということが観察された。

もう一つ、繰り返しストラテジーの使用から見えてくることとして、被験者のタスクの捉え方について言及したい。会話タスクでは正確に情報を聞き取ることは求められてはいないが、被験者は会話を楽しむというより、「お互いの情報を、設定された時間内で正確に伝えあうために話し合っている」という意識が強いように感じられた。外国語として英語を学習している被験者にとっては、会話タスクもインフォメーション・ギャップタスクと同様、与えられた目的を達成する課題、つまりタスクとして認識されていると思われる。

2. 意味のやりとりのきっかけ

ここでは、実験中に見られた意味のやりとりが、どのようなきっかけで生じたかについて論じる。意味のやりとりのきっかけは、タスクによって異なることがわかった。それぞれのタスクに多く見られたきっかけについて、例を挙げて示す。

インフォメーション・ギャップタスクでは、音声に関する問題および日付・時間が、多くの意味のやりとりを引き起こしていた。例 5 は、音声に関する問題がきっかけとなった意味のやりとりを示している。この種類のきっかけは、インフォメーション・ギャップタスクにおいてのみ発見された。例 5 において、S7 と S8 は “can/can’t” を用いて、それぞれが話し合いをもつことができる日程を伝え合っている。しかし、“can” と “can’t” は発音が似ており、正しく聞き分けることが難しいため、繰り返しのストラテジーを用いて、聞き間違いを防ごうとしている。2 行目では、S8 は S7 の直前の発言の中の “can’t” のみを語尾を上げずに繰り返している。語尾を上げていないことから、S8 は自分の中で情報を確認するために繰り返したものと思われる。さらに、直後 (3 行目) に S7 が “Can’t” と答えていることから、2 行目の S8 の繰り返しそれ自体が更なる繰り返しを引き起こしていることが分かる。また、11 行目と 14 行目においても、被験者は、自分が “can” と “can’t” を正しく聞き分けることができたか確認するために、Confirmation check を使用している。

例 5

- | | | |
|----|--|------------------------------|
| S7 | えー, I can't do August twelfth. | |
| S8 | (3) <u>can't</u> | ← Receipt through repetition |
| S7 | <u>Can't</u> | ← Receipt through repetition |
| S8 | ふーん。 | |
| S7 | うん。How do you do? [sic] | |
| S8 | I can't | |
| S7 | ふん。 | |
| S8 | August fourteen. | |
| S7 | <u>August fourteen.</u> | ← Receipt through repetition |
| | O.K. あー, August ninth あー, from fifteen to twenty-one, I can. | |
| S8 | <u>Can?</u> | ← Confirmation check |
| S7 | Can. | |
| S8 | Oh. This time I can't. | |
| S7 | <u>Can't?</u> | ← Confirmation check |
| S8 | Can't. | |

音声に関する問題がきっかけとなり、意味のやりとりが生じたのは、S7 と S8 が、なんとかしてタスクを完了しようとしたためであると考えられる。彼らは、“can/can’t” 以外に自分の予定を伝える表現方法を知らなかった、もしくは、表現方法は知ってはいるが、タスクの中でうまく活用できなかった可能性がある。その結果、自分たちの持っている語彙力を何とか駆使して情報を伝え合おうとした結果、たまたま聞き分けることの難しい語を使用することとなり、意味のやりとりが生じたのである。

インフォメーション・ギャップタスクにおいて、最も多くの意味のやりとりを引き起こしたきっかけは、日付

や時間である。例 6 において、S11 と S12 は月曜日のお互いの予定について話している。1 行目で、S11 が話題を月曜日に移すと、直後に S12 が “Monday?” と語尾を上げて繰り返し、聞き取った情報を確認している。また、次に S11 が “my free time is, あー, from nine” と時間にまで踏み込んで話すと、S12 はすかさず、S11 が発した時刻を繰り返している。この 4 行目の繰り返し “From nine” は、語尾を上げずに発音されており、S12 が自分の中で情報を整理するために用いた Receipt through repetition と考えられる。

例 6

- S11 うーん, So,あ, Monday,
 S12 あ, Monday? ← Confirmation check
 S11 Monday, my free time is, あー, from nine
 S12 From nine. ← Receipt through repetition
 S11 To one.

例 6 が示すように、インフォメーション・ギャップタスクにおいて、日付や時間をきっかけとして、Confirmation check や Receipt through repetition などのストラテジーが引き起こされた。

次に、会話タスクにおける意味のやりとりのきっかけについての分析結果を述べる。会話タスクでは、語彙に関する問題と固有名詞が、多くの意味のやりとりを引き起こしていた。語彙に関する問題がきっかけとなって生じた意味のやりとりを、例 7 に示す。例 7 において、2 つの意味のやりとりが確認できる。S4 と S6 は、S6 の故郷ではどんな果物が有名かということについて話している。3 行目で S7 が “What do you mean?” と Clarification request を使用しているが、それは、直前に S6 が発した “peel” [sic] の意味が分からなかったからである。S6 は “pear” と言いたかったのだが、正しく発音することができなかったのだ。5 行目で S4 によって、“あー, pear.” と訂正されている。よって、この意味のやりとりは、S6 の語彙の問題によって引き起こされたと言える。

この会話中に生じたもう一つの意味のやりとりは、11 行目から始まっている。S6 はスイカを英語でなんと言いか分からず、日本語 “suika” を借用している。S6 のこの発話がきっかけとなり、直後に、S4 が “Watermelon” と訂正をして、意味のやりとりがなされた。さらに、その “Watermelon” がきっかけとなり、S6 の繰り返しへとつながり、意味のやり取りがなされている。

例 7

- S4 What kind of fruits?
 S6 You can eat peel? [sic]
 S4 Pill? What do you mean? ← Clarification request
 S6 *Nashi.*
 S4 Nashi. あー, pear. ← Receipt through repetition, meaning repair
 Ah, O.K.
 S6 Or (1) Peach?
 S4 Peach.
 S6 Um, あー, re, なんだっけ, yellow peach.

- S4 Yellow peach
 S6 Or (2) in Japanese, *suika*?
 S4 あー, Watermelon. ← **Meaning repair**
 S6 Watermelon. ← **Receipt through repetition**

このように、会話タスクにおいては、語彙に関する問題をきっかけとした意味のやりとりが生じていた。被験者は、自身の語彙力を超えてでも、なんとかして自分の思いを相手に伝えようとしたため、多くの意味のやりとりが引き起こされたのだと推測される。

次に、会話タスク中、固有名詞をきっかけとして引き起こされた意味のやりとりを分析する。例8において、S2とS8は、夏休み中に訪れる海岸について話している。4行目で、S8が“Nakoso”という地名に言及したところ、直後にS2によって上がり調子に繰返された。S2は、自分が“Nakoso”を正しく聞き取ることができたかどうか確認するためにConfirmation checkを使用したものと思われるが、6行目において、S8は“Nakoso”をより詳しく説明するため、その海岸が福島県にあると述べている。ここでの意味のやりとりのきっかけは、4行目でS8が発した地名(固有名詞)“Nakoso”であった。

例8

- S2 What, what sea?
 S8 Oarai?
 S2 Whe, Yes.
 S8 Or Nakoso.
 S2 Nakoso? ← **Confirmation check**
 S8 In Fukushima.
 S2 Yah.
 あー, and when will we go Nakoso sea?
 S8 Umm.

会話タスクは、インフォメーション・ギャップとは異なり、話す内容の自由度が高いため、対話者が発する固有名詞を事前に予測できない場合があり、そこから意味のやりとりが生じたものと考えられる。

以上、例5から例8に示されるように、意味のやりとりのきっかけは、タスクの種類によって異なっていた。その違いを生んだ要因として、タスクの目的が関係していると考えられる。インフォメーション・ギャップタスクでは、タスクを達成するために、日付や時間が重要な情報とされていたため、そうした情報をきっかけとして、多くの意味のやりとりが生じたのであろう。音声に関する問題に関しても、「互いの都合のよい日程を探す」というタスクの目的を達成するために用いた表現“can/can't”によって意味のやりとりが引き起こされたのであり、タスクの目的が意味のやりとりのきっかけを左右していたことが推測できる。

会話タスクのきっかけも、インフォメーション・ギャップタスク同様、タスクの目的が影響していると考えられる。地名や物の名前などの固有名詞は、自分の夏休みの予定を説明したり、対話者の話を理解したりするうえで重要な情報であった。また、そうした固有名詞は、対話者にとって、「相手は、次に○○について話すだろう」などと事前に内容を予測することは難しい状況において用いられたため、一度聞いただけ

では確実に理解することが難しく、その言葉の意味を確認しようとして、多くの意味のやりとりが引き起こされたと考えられる。

語彙に関する問題については、タスクの目的だけでなく、被験者の語彙力が関係していると推測される。会話タスクはインフォメーション・ギャップタスクよりも自由度が高く、話す内容に幅があるため、話そうとする内容が会話参加者の語彙力で表現できる範囲を超える場合があり、その結果、意味のやりとりを引き起こすきっかけとなったと思われる。本研究で用いたインフォメーション・ギャップタスクのように、あらかじめ情報が用意されている場合、会話参加者が語彙の問題に直面することはほとんどないが、会話タスクの場合、被験者の語彙力と話の内容のバランスが取れていないと、会話はうまく進まない。その際に、会話を進める手立てとして、意味のやりとりが必要だったと考えられる。

そして、そもそもなぜ被験者が、自らもしくは対話者の語彙力を超えた内容を話そうとしたのかといえば、会話タスクにおいて、自分の夏休みの予定について詳しく述べ、また、相手の予定についても詳しく聞きだすよう求められていたからである。よって、ここでもタスクの目的が大きく関わっていたと言える。

本研究における意味のやりとりのきっかけに関する分析結果は、Nakahama, Tyler, and Lier (2001)とは異なる。本研究は、インフォメーション・ギャップタスクでは日付や時間、音声に関する問題が、また、会話タスクでは固有名詞と語彙に関する問題が、多くの意味のやりとりを引き起こしていることを示した。しかし、Nakayama らの実験では、意味のやりとりのきっかけは、インフォメーション・ギャップタスクにおいては語彙に関するものが多く、会話タスクにおいては会話の内容や談話などに関わるものが多いとされている。

これら違いは、それぞれのタスクの目的と、タスクが主に扱う情報の違いによるものと考えられる。本研究のインフォメーション・ギャップタスクは、日付や時間に着目して行うものであったが、Nakahama, Tyler, and Lier (2001)のインフォメーション・ギャップタスクは、2枚の絵の違いを探すというもので、絵に描かれた物の名前に着目して行うタスクであった。つまり、どちらの研究においても、タスク遂行上重要とされる情報が、多くの意味のやりとりを引き起こしていたという点で、共通しているのである。

3. ストラテジーに対する返答

ここでは、実験中に見られた意味のやりとりを示すストラテジーに対し、対話者がどのような返答をしたかについて考察する。分析の結果、ストラテジーに対する返答も、タスクによって異なることがわかった。

本研究で発見された、ストラテジーに対する返答は、承認、繰り返し、新情報、日本語訳の4種類である。承認と繰り返しについては、インフォメーション・ギャップタスクと会話タスクの両方で見られたが、新情報と日本語訳は、会話タスクでのみ確認された。

例9は、インフォメーション・ギャップタスクにおいて、話し手が意味のやりとりのストラテジーを承認した返答を示している。例9では、3つの *Receipt through repetition* が用いられたが、そのうち2つが対話者からの返答を得ている。どちらの場合も、対話者が話し手の繰り返しを承認する返答を示した。一つ目の意味のやりとりは、4行目から始まっている。5行目において、S13は、直前のS14の発言の一部“two”を、語尾を上げずに繰り返した。すると、その直後にS14は“*Yes*”と言い、このS13による繰り返しが正しい情報であることを承認した。二つ目の意味のやりとりは、8行目から始まっている。一つ目のやりとりと同様、“*Afternoon*” (9行目)のように、*Receipt through repetition* がストラテジーとして用いられているが、S13が繰り返しの後も話し続けたため、S14によるストラテジーに対する返答は確認できなかった。三つ目の意

味のやりとりは、12行目から14行目にかけて行われている。S13が“Five to eight”のように、家族とレストランに行く時間を述べると、S14はその時間をそのまま繰り返した。このS14による Receipt through repetition に対し、S13は“Yes.”と承認を示す反応をした。

例9

- S13 I'm free at, from ten to one.
 S14 Um
 S13 How about you?
 S14 I have, I will have lunch with my friends from eleven to (1) two o'clock.
 S13 Two. ← Receipt through repetition
 S14 Yes. ← 承認
 S13 I see. So
 S14 How about afternoon, afternoon?
 S13 Afternoon. No. ← Receipt through repetition
 I, I will go restaurant with my family.
 S14 Hum.
 S13 Five to eight.
 S14 Five to eight. ← Receipt through repetition
 S13 Yes. ← 承認

承認を示す返答は、会話タスクにおいても観察された。例10は、承認の返答を含む意味のやりとりを示している。この会話の中で、S4とS6は、S6が帰省する時期について話している。6行目までは、S6が8月中は忙しいということと話していたが、7行目において、2秒のポーズによって示されているように、帰省の時期を述べる前に沈黙してしまった。すると8行目で、S4が“September?”と、直前のS6の発言を完成させる単語を推測して述べた。S6は、S4のCompletionに対し、次の“Um hum”という発言で承認したことを示している。

例10

- S6 うーん、あー、 maybe I'm busy
 S4 Hum.
 S6 During August.
 S4 Hum.
 S6 Because I have club activity.
 S4 Hum.
 S6 So I will back my home (2)
 S4 September? ← Completion
 S6 Um hum, maybe. ← 承認

例9, 例10に示されるように, 被験者は, インフォメーション・ギャップタスクと会話タスクのどちらにおいても, 意味のやりとりの中で, ストラテジーを承認する返答を示した。Confirmation check や Clarification request のように, 対話者が語尾を上げて Yes/ No の返答を求めている場合以外にも, 承認の返答が用いられるということがわかった。

次に, 繰り返しの返答についての分析結果を述べる。被験者は, 直前の自分の発言の一部もしくは全部を繰り返すことで, 対話者のストラテジーに反応していた。例11は, インフォメーション・ギャップタスクにおける, 繰り返しを用いた返答を示している。S1とS2は, 月曜日の予定について話している。1行目で, S1が10日(月曜日)について話し合うことを提案したところ, S2はtenthを10時と勘違いし, 3行目で“Ten a.m?”と聞き返した。すると, S1は, 自分が前の発言の中で用いた“Monday”という単語を繰り返し, S2のConfirmation checkに応えた。この返答により, S2は自分の勘違いに気付き, 会話の修復がなされたと考えられる。

例11

- S1 Oh. あーと, How about Monday, あーと, tenth?
Do you have any schedule?
- S2 Ten a.m? ← Confirmation check
- S1 Te, あーと, Monday. ← 繰り返し
- S2 あー。I have lunch with friends on eleven o'clock
- S1 Oh.
- S2 to two o'clock p.m.
- S1 Hum.

例12は, 会話タスクにおける繰り返しを用いた返答を示している。S2とS8は, 夏休みに遊びに行く計画について話している。1行目でS8がS2に対し, 海で泳ぐことは好きか尋ねたが, S2は聞き取ることができず, 2行目で“Pardon?”とClarification requestを使用した。このS2のストラテジーを受け, 3行目において, S8は1行目の自分の発言をほとんど変えずに繰り返している。S8の繰り返しを聞き, S2はS8の意図を理解することができたため, “Yes”を連発して, 応答している。

例12

- S8 あ! Do you like to swim sea, in the sea?
- S2 Pardon? ← Clarification request
- S8 Do you like to swim in the sea? ← 繰り返し
- S2 Yes, yes, yes.
- S8 じゃあ, Let's go to sea with English major member.
- S2 Yes.

例11と例12は, 意味のやりとりを示すストラテジーに対し, 直前の自分の発言を繰り返す返答を例示している。この返答は, 上記の承認と同じく, インフォメーション・ギャップと会話タスクの両方で用いられた。

次に、会話タスクのみで確認された返答について説明する。新情報と日本語訳という2種類の返答が、会話タスクのみで用いられた。例13、例14は、新情報の返答が用いられた意味のやりとりを示している。例13において、S11とS13は、自動車の運転免許証を取得するために必要な金額について話している。1行目で、S13が「運転免許証を取得するために十分なお金を持っていない」ということを意図する発言をしたところ、2行目で、S11からのように、Confirmation checkもしくはClarification requestが発せられた。すると、S13は、次の発話(3行目)において、直前の自分の発言について説明するために、新しい情報を提供した。S13は、2行目のS11の“Money?”という発話を、Clarification requestととらえ、1行目の自分の発話の意図が、S11に意図が伝わらなかったと考えた可能性がある。しかし、S13が単に確認の意味でConfirmation checkを用いたのか、それとも詳しい説明を求めてClarification requestを用いたのかについては、依然として不明である。

例13

- S13 But I don't money.
 S11 Money? ← Confirmation check/ Clarification request
 S13 あー, We about, あ, dri, to get driver license, it's very expensive. ← 新情報
 S11 Ah, ah. How much?
 S13 About えー,
 S11/S13 (laughing)
 S13 About two hundred thousand yen?

例14では、S11が、夏休みに東京を訪れることについて話している。S13に、夏休み中、どこに行くか聞かれ、S11は、2行目で、“Tokyo”とだけ答えた。すると、S13は“Tokyo”と、1単語を上がり調子にせずに繰り返した。S11は、そのReceipt through repetitionを受け、4行目から6行目にかけて、“Tokyo International Forum Theater”という新しい情報を提供している。

例14

- 13 え, Where do あ, Where will you go?
 11 うーんと, Tokyo.
 13 Tokyo. ← Receipt through repetition
 11 うーん, Tokyo International Forum ← 新情報
 13 あー。
 11 Theater.
 13 I don't know.
 11 Oh.

例13、例14に示されるとおり、被験者は、会話タスクにおいてのみ、意味のやりとりを示すストラテジーに対する返答として、新しい情報を提供した。この結果には、タスクのインストラクションが影響していると考えられる。インフォメーション・ギャップタスクでは、互いの予定を合わせる事が最終目標であり、予定

の内容を詳しく話し合うことは求められていなかった。一方、会話タスクでは、互いの予定をより詳しく話し合うことが目標とされていたので、被験者は、自分の話したいことをできるだけ詳しく相手に伝えようとした。そのため、対話者の発したストラテジーに対し、Yes/No でなく、新情報の提供という形で返答したのであろう。

新情報の返答を分析した結果、もう一つ発見があった。話し手は、対話者の意図とは異なる返答をする場合もあるということである。ストラテジーの定義からいえば、新情報や詳しい説明を求めて使用するストラテジーは、Clarification request である。しかし、結果として被験者は、その他のストラテジーに対しても、新しい情報を用いて返答していた。この結果から、ストラテジーを使用する側の意図と、返答する側のとらえ方との間に差異が生じているということが推測される。

もう1種類の返答も、会話タスクのみでみられた。例15は、日本語訳を用いた返答を示している。S2とS8は、夏休みに温泉に行く話をしている。3行目で、S8が“hot spring”という語を発したところ、S2は“Hot spring?”と聞き返してきた。その後の反応(6行目)から考えて、S2は“hot spring”の意味がわからなかったために、Clarification requestを意図していたと思われる。S8は、そのストラテジーに対する返答として、5行目で、“hot spring”の日本語訳を提示した。この日本語訳により、S2は会話の内容を理解することができ、6行目で“Yes!”という反応を示した。

例 15

- | | | |
|----|-------------------------------|-------------------------|
| S8 | And we want to go to hot spa. | |
| S2 | Yah. | |
| S8 | あ, hot spring. | |
| S2 | Hot spring? | ← Clarification request |
| S8 | <u>In Japanese, Onsen.</u> | ← 日本語訳 |
| S2 | おー! Yes. | |

会話タスクでは、インフォメーション・ギャップタスクよりも多くの話題が登場したため、しばしば、対話者が発した語の意味がわからないという問題が生じた。そこで、ストラテジーに対する返答として、問題を引き起こした語句の日本語訳を提示することで、会話の流れを阻害する問題を解決したのである。会話タスクにおける意味のやりとりの主なきっかけが語彙であったことから、ストラテジーに対する返答として日本語訳が用いられたのは、当然の結果であろう。

以上、例9から例15に示されるように、本研究において、意味のやりとりを示すストラテジーに対する返答としては、主に4種類が確認された。承認と繰り返しの返答は、タスクの種類に関係なく用いられ、一方、新情報と日本語訳は、会話タスクでのみ用いられた。これは、各タスクの特徴が影響した結果と考えられる。

おわりに

本研究は、インフォメーション・ギャップタスクと会話タスクにおける意味のやりとりを分析し、その質的な違いを明らかにすることを目的として行われた。日本人大学生14名を対象に実験を行い、対話を分析したところ、意味のやりとりのきっかけ、ストラテジー、ストラテジーに対する返答は、タスクによって質が異な

るということがわかった。

どちらのタスクにおいても、繰り返しを活用した戦略が多く用いられていたが、繰り返しの内容としては、インフォメーション・ギャップタスクでは日付や時間で、会話タスクでは固有名詞であった。さらに分析したところ、会話の中で繰り返される内容は、タスク完了のために必要不可欠な情報であることがわかった。こうした繰り返しは、対話者に質問を投げかける場合だけでなく、話し手自身が聞き取った情報を整理したり確認したりする場合にも用いられていた。

また、意味のやりとりの主なきっかけは、インフォメーション・ギャップタスクでは音声に関する問題と日付や時間で、会話タスクでは語彙に関する問題と固有名詞であった。先行研究の結果と比較したところ、意味のやりとりのきっかけは、タスクの目的と、そのタスクの中で主に扱われる情報に左右されるということがわかった。

意味のやりとりの戦略に対する返答を分析した結果、承認と繰り返しについては、インフォメーション・ギャップタスクと会話タスクの両方で確認されたが、新情報と日本語訳を用いた返答は、会話タスクのみでみられた。この結果には、会話タスクのインストラクションや内容の自由度などの特徴が影響していると考えられる。

本研究の被験者は、6年以上英語教育を受けているにもかかわらず、繰り返しを活用した戦略に偏りがちであり、バリエーションに欠けていた。日本人英語学習者のコミュニケーション能力を養うためには、インフォメーション・ギャップタスクと会話タスクのような種類の異なるタスクを用いて、質の異なる意味のやりとりを体験させ、より多くの戦略を学習させることが必要といえる。そうすることで、学習者はより多くの理解可能なインプットを得るとともに、自らのアウトプットを修正する機会をもつことができる。より効果的なタスクや教授法を見出すためにも、意味のやりとりに関する更なる研究が必要である。

謝辞

本研究において実験を行うにあたり、予備実験も含め、大学生 18 名にご協力いただきました。誠にありがとうございました。

引用文献

- 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- Chesterfield, R. and Chesterfield, K. (1985). Natural order in children's use of second language learning strategies. *Applied Linguistics*, 6, 45-59.
- Council of Europe. (2001). *The Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press.
- Ellis, R. and Barkhuizen, G. (2005). *Analyzing learner language*. New York: Oxford University Press.
- Gass, S. M. and Varonis, E. M. (1985). Task variation and nonnative/nonnative negotiation of meaning. In Gass, S. M. and Madden, C. G. (Eds.), *Input and second language acquisition* (pp. 149-161). Massachusetts: Newberry House.
- Greer, T., Andrade, V., Butterfield, J., and Mischinger, A. (2009). Receipt through repetition. *JALT Journal*, 31

(1), 5-34.

- Liskin-Gasparro, J. E. (1987). *Testing and teaching for oral proficiency*. Boston, Massachusetts: Heinle and Heinle Publishers Inc.
- Long, M. H. (1983). Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics*, 4 (2), 126-141.
- Long, M. H. (1996). The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. C. Ritchie and T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of research on second language acquisition: Vol. 2. Second language acquisition* (pp. 413-468). New York: Academic Press.
- Nakahama, Y., Tyler, A., and Lier, L. V. (2001). Negotiation of meaning in conversational and information gap activities: A comparative discourse analysis. *TESOL Quarterly*, 35, 377-405.
- Seedhouse, P. (1999). Task-based interaction. *ELT Journal*, 53/3, 149-156.
- Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and output in its development. In Gass, S. M. and Madden, C. G. (Eds.), *Input and second language acquisition* (pp.115-136). Massachusetts: Newberry House.
- Swain, M. (1995). Three functions of output in second language teaching. In G. Cook and B. Seidlhofer (Eds.), *Principle and practice in applied Linguistics* (pp. 125-144). Oxford: Oxford University Press.
- Varonis, E. M. and Gass, S. M. (1985). Non-native/non-native conversations: A model for negotiation of meaning. *Applied Linguistics*, 6, 71-90.